

ニジマスの黒化症について(2)

家坂 剛正

病魚の症状及び発生経過は前報¹⁾で述べた。病因については、過去において病魚の内臓諸器官より菌の分離を試みたが細菌は検出されず、また、組織学的にも未だ病変を認めていないので原因不明であるが、一応栄養障害と想定して種々栄養剤を投与し、その予防効果について検討した。

試験の方法

平均体重63gのニジマス1年魚1,000尾1区を11.4m×2.3m×水深0.4mの池に放養し、市販粉末配合飼料に各種栄養剤を添加して昭和44年4月1日から9月30日まで6ヶ月間投与を続けた。供試栄養剤としては、グロンサン(略記号GS;魚体重1kgに対して0.5g投与)、ビタミン混合(VM;粉末配合飼料に対して1%投与)、ユベラフード(UF;魚体重1kgに対して0.2g投与)、マリクロン(MC;魚体重1kgに対して3g投与)を用いた。

グロンサン:製剤100g中グロンサン1.8g、その他、酵母、各種ビタミンを含有。

ビタミン混合:Halver処方。

ユベラフード:ビタミンE剤で、アルファトコフェロールとして製剤100g中10g含有。

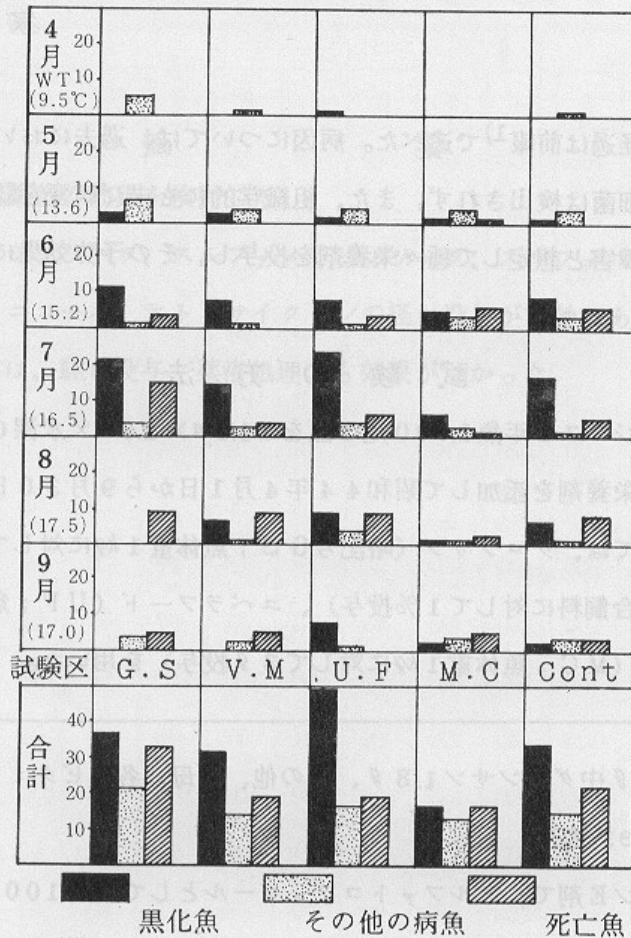
マリクロン:胆汁末製剤で、製剤100g中胆汁末3g、乾燥ビール酵母70g、炭酸カルシウム27g含有。

病魚の判定については、体表が黒味を帯び、魚群から離れて池底に静止または水面に浮遊しているものを「黒化魚」、体色は正常で魚群を離れているものを「その他の病魚」、死後、時間が経過したために体色が判然としないものを「死亡魚」として処理した。

給餌量はLeitlitzの表に従い、給餌は1日1回とした。

第2図にみられるように、黒化魚の発生は各区とも7月に最も多く、4月から9月までに発生した黒化魚数の半数近くを占めている。マリクロン投与区は最も少なくなっており、対照区との差は有意であった。黒化魚以外の病死魚も相当の比率を占めており、無視することはできない。黒化魚

の場合には体色黒化後相当長期間生存しているのが普通であるが、「死亡魚」は発病後急激に死亡するものであり、「黒化魚」と同一疾病の急性型か、あるいは、「黒化魚」以外の疾病と考えられる。従って、今後この病因を究明し、対策を確立する必要がある。



第1図 黒化魚及びその他の病魚の発生経過

摘 要

ニジマス黒化症の予防対策としてグロンサン、ビタミン混合、ユベラフード、マリクロンの各種栄養剤の投与を試みた結果、「黒化魚」の発生はマリクロン投与区において最も少なく、対照区との差は有意であった。

文 献

- 1) 家坂剛正他, 1970; ニジマス黒化症(仮称)について, 岐水試研報 第15号